

企業交流会実施報告



第30回企業交流会報告

事業部会/企業交流会企画委員会

1. 企業交流会概要

2019年3月8日(金)、第30回企業交流会を広島のマツダ(株)で開催した。マツダ(株)は2回目の開催だが今回は学会会員だけでなくサプライヤーとの交流も含めた企業交流会とした。テーマは「自動車開発の生産性向上に挑む—MBDを軸とした新しい開発体制—」で、自動車開発における技術マネジメントや評価、特にMBD(Model Based Development)機能性/ロバスト性評価等をキーワードに、どのように自動車開発を変えていくべきか、技術マネジメントと評価のありかたについて議論した。今までの企業交流会とは異なる幅広い層での交流になった。参加者は発表者を含めて学会側から81名、非会員90名、計171名で非会員の参加者が多く、またマツダ(株)側からも約500名と盛況な交流会となった。参加者からのアンケートおよび感想文も含めて報告



会場の様子

する。

冒頭、学会の谷本会長からは「平成最後の企業交流会」との言葉。平成を振り返ると日本産業の失墜があり、そこで本当に起こっていたのがグローバル化とデジタル化への変化で日本の経営者はそこに気がつくのが遅れた。本当に必要だったのが技術開発の効率化で、それが日本の低迷の原因であったが、いまだにそこから脱却できていない。そのような状況の中でマツダでの企業交流会を開催できるのは幸いであり、それぞれ皆様で全体最適のヒントを持ち帰って頂きたいとの話しで始まった。

2. プログラム内容

2.1 マツダ車両開発本部長挨拶：

松本浩幸(マツダ(株))

マツダは1920年設立され、従業員は約2万人である。広島、横浜、欧米、中国に開発・生産拠点があり、来年創立100周年を迎える。マツダブランドのありたい姿は「お客様と強い絆で結ばれた会社」であり、今まで熱烈なファンに支えられ、さらに期待を超える商品、技術、デザイン、サービスを目指している。そこには人間中心の開発哲学が必要。自動車には人間と機械の世界があり、従来は部品評価と官能評価が遠く離れていた。部品を入れ替えては官能評価をしていたが徹底的に人間の世界を研究し、「実現したい規範運動」を作り、それを中間に人間の世界の研究と機械の研究をつなげることができる。それをMBD・品質工学で実現しようとしている。開発の生産性を高める議論をし、これを契機に業界全体の生産性向上につなげたい。